

# ブリ種苗放流技術開発事業（抄録）

村山達朗

日本栽培漁業協会が行うブリ種苗放流技術開発事業の一環として、ブリ分布・生態・資源動向を究明するため下記の調査を実施した。

1. 標識放流調査
2. 漁獲統計資料の解析
3. 昭和57年度～平成4年度までの調査の取りまとめ

詳細は「日本栽培漁業協会研究資料 No. 59」に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。なお、巻末に調査期間中の生物測定資料を記載した。

## 結果の概要

### 1. 標識放流調査

- (1) 山陰沿岸と東シナ海に分布する未成魚と成魚の回遊状況、特に山陰沿岸で春季に漁獲される2歳魚と、秋季に山陰から九州沿岸で主に釣漁業で漁獲される2歳魚および冬季から春季に同海域で定置網漁業で漁獲される3歳魚との関係を検討することを目的として調査を行った。
- (2) 放流魚は島根県簸川郡大社町日御崎周辺漁場で釣獲された299尾である。標識魚は1992年4月24日に142尾、5月6日に157尾と2回に分けて放流した。
- (3) 放流魚は体長組成と山陰沿岸で漁獲された本種の年齢推定結果（村山，1992）から、主に2歳魚から構成されていると推測される。
- (4) 1993年3月20日現在の再捕尾数は4月24日放流群が19尾、5月6日放流群が27尾で、再捕率はそれぞれ13.4%と17.2%であった。
- (5) 再捕海域はほとんどが放流海域の周辺で、兵庫県沖で放流後146日後に再捕されたもの以外、島根県外で再捕された個体はなかった。
- (6) 再捕報告は、放流後20日間はほとんどなく、放流後21日から80日の間に集中していた。放流後81日以降も150日までは散発的に再捕報告があった。

### 2. 漁獲統計資料の解析

#### (1) 1992年の島根県の漁況

- ①1992年級（モジャコ）：本年の島根県におけるモジャコの採捕期間は6月1日から7月30日であった。モジャコの来遊量は全般的に少なめで、漁況は低調に推移した。魚体はばらつき

が大きく70gから15gまではっきりわかれていた。

- ②1992年級：9月頃から各地の定置網に散発的な入網がみられはじめた。10月に入りまき網、刺網でもまとまった漁獲がみられるようになり、10-12月期はほぼ平年並みの漁獲量となった。
- ③1991年級：1-3月期に刺網により平年をやや上回る漁獲がみられた。4-6月期は各地とも好漁で、漁獲量は平年を大きく上回った。7-9月期は海域による漁況の差が大きくなり、県西部ではまき網により平年を上回る水揚げがみられたが、東部では平年を大幅に下回る低調な漁況で推移した。10-12月期は全般に低調な漁況で推移した。
- ④1990年級：4-6月期、7-9月期とも平年並みからそれを上回る漁模様で推移した。特に、隠岐諸島周辺海域では、5月に定置網と刺網で、8月にはまき網でまとまった漁獲がみられた。
- ⑤1989年以前級：1-3月期は不漁であった前年の漁獲量は上回ったものの、平年を下回る低調な漁況で推移した。

## (2) 各都道府県の農林統計資料の解析

- ①全国の統計事務所から各都道府県の年別漁業種類別ブリ類漁獲量の資料を収集し、まき網漁業、刺網漁業、釣漁業、大型定置網漁業および小型定置網漁業によるブリ類漁獲量の時間的、空間的変動傾向を解析した。
- ②1950、60年代に大型定置網を除く未成魚を主対象とした漁業種で、全国的に努力量が増大していったと考えられる。
- ③1970年代以降本種の来遊量の変動傾向に顕著な海域差が生じたが、各漁業種の漁獲量の変動傾向にも同様の海域差が確認された。すなわち、成魚・未成魚の来遊量がより安定している西(南)部海域では、多くの漁業種の漁獲量が安定かあるいは増加傾向にあった。このことは、少なくとも西(南)部海域では、50、60年代に形成された漁獲圧が70年代以降も持続し、漁獲量の変動が来遊量の変動をある程度反映するようになったことを示唆している。
- ④漁獲量の空間変動に注目した結果、漁業種により相対的多獲域が異なることが明らかになった。これは、来遊するブリの年齢組成や生態が海域によりかなり異なることを示唆している。また、対馬暖流域の北陸地方～長崎県および太平洋沿岸域の三重県はあらゆる漁業種の多獲域であり、これらの海域ではブリの来遊量そのものが豊富である可能性がある。